

2019 第十二回 台日原住民族研究論壇 日台原住民族研究フォーラム

12th Taiwan-Japan Forum on Aboriginal Studies

文 | 劉芳妤

(政治大學原住民族研究中心專任助理)

譯者 | 陳由璋 (政治大學民族學系博士生、日本北海道大學愛努・先住民族學講座博士生)

文責 | 劉芳妤

(政治大學原住民族研究中心專任助理)

記者 | 陳由璋 (政治大學民族學科博士課程、北海道大學アイヌ・先住民族學講座博士後期課程)

政大原住民族研究中心於2019年9月3日、4日，辦理「台日原住民族研究論壇」，自2008年開始與日本順益台灣原住民研究會共同舉辦以來，已攜手邁入第十二屆，今年更特別邀請到日本北海道大學愛努・先住民研究中心協力合作，並移師宜蘭縣史館盛大舉辦。今年的論壇議題豐富多元，以原住民族語言推動、平埔族研究、愛努民族研究及宜蘭文史研究為四大主題。

「聚焦」：民族政策、語言推動

第一場次「原住民族研究」由原民會副主委鍾興華及北海道大學常本照樹教授進行發表，2人皆從法律制度面討論對台灣平埔族、日本愛努民族的影響，檢視目前平埔族及愛努民族在民族身分及權利保障等方面的建構情形。2019年2月，日本國會正式通過「愛努施策推進法」，將做為愛努民族持續推動權益的

2019年9月3日、4日，政治大學原住民族研究中心是「日台原住民族研究フォーラム」を主催し、2008年より日本順益台灣原住民研究会と共同主催してから以来、12回目になった今年は、特に日本北海道大学アイヌ・先住民研究センターを共催者として招き、宜蘭県史館に移し、盛大に行われた。今年のフォーラムは議題が豊富かつ多元的で、原住民族言語推進、平埔族研究、アイヌ民族研究、宜蘭歴史文化研究という四大テーマである。

「フォーカス」：民族政策、言語推進

第1セッションの「原住民族研究」には、原住民族委員会の鍾興華副委員長と北海道大学の常本照樹教授が発表した。二人とも法的制度から台湾の平埔族、日本のアイヌ民族への影響を論議し、現在平埔族とアイヌ民族に対する民族身分及び権利保障などの側面における構築の現況を見直した。2019年4月、日本国会に正式に通過された「アイヌ施策推進法」は、アイヌ民族が持続的に権利を推進することを保障する法律とな

保障法規；台灣方面，亦針對平埔族身分認定進行多次討論，而承認平埔族的原住民身分，乃是歷史正義的展現，目前「原住民身分法修正草案」正在立法院進行審議中。

論壇的另一重點在第二場次「語言推動」，由台灣維基媒體協會理事上官良治及原民中心專任助理楊懿湘進行發表。近年來，台灣的民族語言復振有了嶄新的推動管道：政大原民中心及台灣維基媒體協會致力於推動族語維基百科的孵育計畫，目前以撒奇萊雅語維基孵育場最為活躍，在不久的將來，有望成為台灣第一個原住民族語維基百科。此外，2017年起原民中心開始推行瀕危語言復振計畫，至今小有成績，中心就推動歷程、復振成果及未來目標呈現於報告中，與前者同樣，均為台灣原住民族語言的復振注入活水。

原住民族電視台當日即以兩段新聞來報導此兩場發表，四位發言人分別受訪，北海道愛努族與台灣平埔族在權益推動的過程得互相做為借鏡，也是這幾年來非常受到關注的命題，透過媒體的宣傳，希冀能夠引起更多的迴響。

平埔族研究

本屆有2篇與平埔族有關的研究發表：在鍾副主委的破題下，羅東高商簡瑛欣主任透過蘭陽地區信仰關係的流變及歷史傳說，來發掘宜蘭噶瑪蘭族的蹤影；而政大民族學博士廖志軒則關注竹塹社道卡斯族，從土地權利轉移的史料到氏族祭祀公業至今的運作情形，一探新竹地區的平埔族在當代的發展樣貌。台灣平埔族與日本愛努民族在當代有相似的發展背景，彼此追求民族權益的歷程可以互相借鏡，因此這2篇平埔研究均受到日本學者的高度關注。



開幕式由台方林修澈教授(左二)、廖英杰館長(左一)、日方笠原政治教授(右二)、常本照樹教授(右一)代表致詞。

開幕式で台湾から林修澈教授(左二)、廖英杰館長(左一)、日本から笠原政治教授(右二)、常本照樹教授(右一)が代表として挨拶する。

った。台湾の方は、平埔族の身分認定に対しても何回も議論し、平埔族の先住民族身分への承認こそ、移行期正義の表現である。現在、「原住民身分法修正草案」は立法院に審議中。

フォーラムのもう一つのポイントは、第2セッションの「言語推進」であり、台湾ウィキメディア協会の上官良治理事と政治大学原住民族研究センターの専任アシスタントの楊懿湘が発表した。近年、台湾の民族言語復興は斬新な推進ルートができて、政治大学原住民族研究センターと台湾ウィキメディア協会は民族言語ウィキペディアのインキュベータープロジェクトを進め、現在最も活発するのはサギザヤ語のインキュベーターであり、遠くない将来には、台湾初の原住民族語のウィキペディアになることを望む。また、2017年から政治大学原住民族研究センターにより推進されてきた危機言語復興プロジェクトは、今では小さな成果が実った。センターは推進過程、復興成果及び未来の目標をその報告に呈し、前者と同じに、共に台湾の原住民族の言語復興に活気を注いでいる。

当日、原住民族テレビ局はこの二つのセッションを二つのニュースとして報道し、4人の発表者はそれぞれに取材された。北海道のアイヌ民族と台湾の平埔族は、權益の推進過程にお互いに鑑み、この数年来非常に注目されているテーマであり、マスコミの宣伝を通して、より多くのフィードバックがよせることを期待する。



第十二屆台日論壇紀念合影。
第十二回日台フォーラム参加者の集合写真。

「蘭學」：蘭陽地區原住民族研究

本次論壇的地點在宜蘭縣史館，縣史館長年耕耘蘭陽地區之文史研究，本身也累積了豐富的研究成果。廖英杰館長本身更是長年從事泰雅族研究，本次論壇中發表論文，藉由台北帝大土俗人類研究室的研究資料探討宜蘭南澳泰雅族社群的遷徙情形。縣史館李素月研究員則報告歷年來縣史館的館藏資料，及對於蘭陽地區原住民史料方面之研究成果，使今年的台日論壇展現了以往較難得一見的地方特色。

ALCD 20年

2019年對政大原民中心而言亦是重要的里程碑。政大原民中心前主任林修澈對原民中心20週年歷程進行報告，原民中心自1999年成立，迄今承接各類在台灣原住民族領域中具有份量的研究案及計畫案，並多次舉行國際學術交流活動，這20年來，原民中心持續為原住民族及台灣地方文史做耕耘，一路走來舉步維艱，但成果豐碩，報告中完整呈現了政大原民中心過往20年來的點滴。

平埔族研究

今回平埔族に関する研究は2本がある。鍾副委員の破題をはじめ、羅東高商の簡瑛欣主任が蘭陽地域における信仰関係の変遷と歴史伝説を通して、宜蘭のクバラン族の行方を見つける。政治大学民族学廖志軒博士は、竹塹社のタオカス族を注目し、土地権利の移転の史料から今の氏族祭祀公業の運営状況に至り、現在の新竹地域の平埔族の発展のご様子を探った。台湾の平埔族と日本のアイヌ民族は時代的に類似する発展背景があり、それぞれ民族の権益を追求する過程はお互いに鑑みることができるので、この2本の平埔族研究には、日本の学者が強い関心を持つ。

「蘭学」：蘭陽地域の原住民族研究

今回のフォーラムの開催地は、宜蘭県史館であった。県史館は長年で蘭陽地域の文化と歴史研究に力を注ぎ、自分にも豊かな研究成果が重なった。廖英杰館長は、タイヤル族研究も長年に携わって、今回のフォーラムには、台北帝国大学土俗人類研究室の研究資料により、タイヤル族の亜族の宜蘭の南澳グループの移動状況について発表した。県史館の李素月研究員は、歴年の県史館の所蔵資料及び蘭陽地域の原住民史料の研究成果を報告し、今年の日台フォーラムには、今まであまり見えない地方性を表した。

ALCD の20年間

政治大学原住民族研究センターにとって、2019年は重要なマイルストーンである。政治大学原住民族研究センターの元センター長の林修澈は、センターの20周年の歴史を報告した。センターは1999年に成立し、今まで台湾原住民族の分野における各種類の重大な研究プロジェクトと計画プロジェクトを委託されてきて、国際学術交流のイベントは何回も行った。この20年間、センターは原住民族及び台湾地方の歴史文化を持続的に努力し、いろんな困難に遭ってきても、豊かな成果が実った。今回の報告は、政治大学原住民族研究センターが歩んできた20年のすべてを完成に呈した。

民族研究與政策的互動

台北市原民會前主委陳誼誠、政大民族系博士生周士煌則聚焦於民族研究與政策實務面之間的關係性，探討「民族」和「民族身分」之間交叉理論之發展趨勢，分析台灣原住民族政策和民族教育研究發展的關連，研究理論與政策實務該如何取得良好的平衡？仍待吸取更多經驗。

傳統原住民族議題研究

台日論壇的特點在於台灣、日本民族議題的多面向研究發表，今年也不例外，除了上述幾個耳目一新的主題之外，經典的原住民族研究議題也不能缺席：日本獨協大學松岡格教授檢視日本時代移住政策對原住民聚落的視覺呈現的影響、原民中心黃季平主任探討台灣原住民族口述傳統的定義與實作，以及日本國立民族學博物館野林厚志教授整理了台灣原住民族，乃至於世界各個少數民族的傳統狩獵方式，以數種不同面向切入，藉由這些或經典或新興的原住民族議題，可以看見台灣原住民族相關的研究視野愈發開展。

原住民族事典工作坊

今年的台日論壇尚有一場「會外會」。政大原民中心承接教育部「台灣原住民族事典建置計畫」，而日本順益研究會曾於2001年出版《台灣原住民研究概覽》，收錄數十筆由當代日本學者執筆的「重要文獻」詞條，在此基礎上，政大原民中心希望能夠將這些詞條收錄至民族事典當中，故於宜蘭太平山莊舉行了「台日雙方學術合作工作坊」，邀請與會日本學者瞭解計畫執行情形，並就詞條撰寫等相關事宜達成了初步共識，期待未來將有更多為台日雙方創造合作之契機。

民族研究と政策の相互作用

台北市原民會の元委員長の陳誼誠、政治大学民族学科博士課程の周士煌は民族研究と政策実務の關係性に焦点を当て、「民族」と「民族身分」の間の相互的な理論の發展傾向を議論し、台湾原住民族政策と民族教育の研究發展との關連性を分析し、理論と政策実務はどのように良いバランスを保つことを研究した。さらに多くの經驗を吸収することを期待する。

伝統的な原住民族議題の研究

日台フォーラムの特徴とは、台湾、日本の民族議題の多面的な研究を發表することで、今年も例外がなく、前述した耳新しいテーマのみならず、定番な原住民族研究の議題はもちろん欠かせないことである。日本の独協大学松岡格教授は、日本時代の移住政策による原住民集落の視覚的な表現への影響を見通し、政治大学原住民族研究センターの黄季平センター長は、台湾原住民族の口承伝統の定義と実務的な扱いを検討し、日本国立民族学博物館の野林厚志教授は台湾原住民族を始め、世界の各少数民族の伝統狩獵法を整理した。こうしたそれぞれ異なる側面から議題に入り、前述した伝統的または新しい原住民族議題を通して、台湾原住民族に関する研究視野が広めていくことが見られる。

原住民族事典ワークショップ

実は、今年の日台フォーラムは「もう一つの会議」があった。政治大学原住民族研究センターは教育部に「台湾原住民族事典構築プロジェクト」を委託された。2001年に日本順益研究会は『台湾原住民研究概覽』を出版し、現在の日本学者の執筆した数十件の「重要文獻」の項目は収録された。こうした基礎を踏まえ、政治大学原住民族研究センターは、前述した項目を今回の民族事典にも収録させたいので、宜蘭の太平山荘で「日台双方學術協力ワークショップ」を開き、日本の学者を招き、プロジェクトの執行状況を解説し、項目の執筆に関する初步的合意が達成され、将来は日台双方が協力する契機をもたらせるよう期待する。